2014
夏休み
すいせん図書

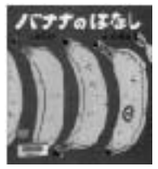
～本の森へ～

西東京市図書館

1・2年生

「バナナのはなし」　伊沢尚子　文　及川賢治　絵／福音館書店

バナナをれいぞうこでひやしたら、いっしゅうかんご、くろくなった！きいろいバナナのかわにつまようじで字をかいてみたら、くろく字がうきあがってきた。なんでかな？おいしくてふしぎなバナナのひみつがわかるおはなしです。



「あかいほっぺた」　ヤン・デ・キンデル　作　野坂悦子　訳／光村教育図書

さいしょはなんでもないことからはじまった。わたしがトムのほっぺたをゆびさして「へんなの、まっかだよ」っていった。そのうち、みんなでトムのことをからかうようになってしまった。わたしははやくおわってほしい、トムといっしょにあそびたいとおもっていたけど、みんなのまえではいえなかった。

「おはじきの木」　あまんきみこ　作　上野紀子　絵／あかね書房

日本が戦争をしていたとき、「にれの木」の下でおはじきをしながら、ひとりでおかあさんと弟をまっていたかなこ。でも、かなこはこの木の下で、死んでしまいました。戦争がおわってから、おとうさんが「にれの木」をたずねてきました。

「一さつのおくりもの」　森山京　作　鴨下潤　絵／講談社

クマタは、「かいがらのおくりもの」というえほんが大すきです。「きみは、えらいね。」クマタはそっと、えほんの中のキツネの子にはなしかけました。だって、キツネの子は、いちばんすきなかいがらを、ともだちにあげたからです。「ぼくだったら、いくらなかよしでも、できないよ」クマタはそうおもいました。

「みてても、いい?」　礒みゆき　作　はたこうしろう　絵／ポプラ社

いたずらずきのきつねを、まいにち、「みてても、いい？」とやってくる、ひっこみじあんのうさぎ。さいしょ、きつねは、じーっとみてくるうさぎを、じゃまくさいとおもっていました。でも、いつのまにか、うさぎがくるのが、きつねはなんとなくたのしみになっていました。

「なぞかけときじろう」　もとしたいづみ　作　国松エリカ　絵／岩崎書店

江戸時代、長屋にすむ町の人たちの間では、なぞなぞで対決する『なぞかけ大会』が大流行。特に、とけない「なぞなぞ」はない、という評判の少年「なぞかけときじろう」は子どもから大人までみんなの人気者です。ある日、そんなときじろうのところへなぞなぞのてがみがきます。それが、事件のはじまりでした。

「しろいいぬ?くろいいぬ?」

マリオン・ベルデン・クック　文　光吉夏弥　訳　池田龍雄　絵／大日本図書

ワッグルズはやどなしのしろいこいぬです。あるひ、ひろったあおいぼうしをくわえていたら「どろぼう！」といわれて、いぬとりにおいかけられてしまいます。せきたんのはこにかくれたワッグルズは、なんとまっくろなこいぬになってしまいました。

「おばあちゃんとつくったよ！おいしいほしがき」

宇部京子　文　細川剛　写真／ひさかたチャイルド

しぶがきをほしてつくった「ほしがき」をしっていますか。しぶいかきも、かわをむいて、おひさまのあたるところにほしてたべると、おいしくってあまい「ほしがき」になります。どのようにつくるのか、このほんでしらべてみましょう。

3・4年生

「むらの英雄―エチオピアのむかしばなし―」わたなべしげお　文　にしむらしげお　絵／瑞雲舎

むらの12にんのおとこたちが、こなをひいてもらうために、まちへいきました。かえりみち、なかまがいきとおなじように12にんいるかどうかきになり、かぞえてみました。ところが、じぶんをかぞえていなかったので、11にんしかいません。こんどはべつのおとこがかぞえました。やはりじぶんをかぞえていなかったので、11にんしかいません。「たいへんだ！だれかがいないぞ！」おおさわぎになりました。

「ちえちゃんのおはじき」　山口節子　作　大畑いくの　絵／佼成出版社

おばあちゃんといっしょに神楽坂にやってきたそら。おばあちゃんから戦争がはげしくなってきたときに、ともだちのちえちゃんとうめたおはじきのはなしをききます。うめたばしょのめじるしである、赤城神社の大いちょうの木や神楽殿はなくなっていましたが、ふたりは、そのおはじきをほりだすことができました。するとそらに、ふしぎなことがおこります。

「ふしぎの時間割」　岡田淳　作・絵／偕成社

一年生のみどりが、学校の中でひとりでいけるところは、トイレだけ。それなのにきょうは、保健室までいかなければならない。廊下にはってあるいろいろな色のピータイルの緑色だけを踏んでならいけるかもしれない。その時、うしろからねこがきた。ねこは「おれの体は黒いから、おれは黒のピータイル」といって追い越していった。朝から夜まで、ふしぎな時間割はつづきます。

「行ってきまぁす！」　升井純子　著／講談社

小学校4年生になった歩美は、楽しみだった「ノルミルラリー」に参加することにした。三人以上で参加するこのラリーは、市内の観光名所や工場でスタンプ帳にスタンプを押してくると、その数によって、大中小のきらきら光るバッジがもらえるのだ。そして何より楽しみなのは、これまでは親といっしょでないと行けなかった場所に、行くことができること。でも、ラリー初日からいろいろな事件がおこる。

「やさしい大おとこ」　ルイス・スロボドキン　作・絵　こみやゆう　訳／徳間書店

むかし、山のおしろにこころのやさしい大おとこが、ひとりぼっちでくらしていました。大おとこは村の人間たちと友だちになりたいとおもっていましたが、わるいまほう使いのうそによって、人間たちは大おとこをこわがっていました。大おとこの声はかみなりのように大きいので、人間たちは耳をふさいでしまい、話をすることもできません。そんなあるひ、ひとりの女の子が大おとこのやさしさにきづきます。

「ハンナの学校」　グロリア・ウィーラン　作　中家多惠子　訳　スギヤマカナヨ　絵／文研出版

ハンナは目がみえないけれど、いろんなことを空想するのがとくいな女の子。姉のヴァーナと弟のジョニーが通っている学校には行かず、家でママの話し相手になって過ごしていた。そんなハンナの家に、新しくやってきたロビン先生が下宿することになった。ロビン先生は、ハンナがみんなといっしょに学校へ行けるよう、パパとママにたのんでくれた。

「月の満ちかけ絵本」　大枝史郎　文　佐藤みき　絵／あすなろ書房

太陽がしずんだら、月をさがしてみよう。月は毎夜、形を変えている。むかしは電気がなくて、明かりでもあった月を心から大切に思っていた。月の満ちかけで、日を数えた。月と人は今よりも、もっともっと生活にむすびついていたんだ。そんなむかしの人の気持ちを思いながら、月の満ちかけのふしぎをさぐってみよう。

「ホネホネすいぞくかん」西澤真樹子　監修・解説　大西成明　しゃしん　松田素子 ぶん／アリス館

むかしむかし、ホネをもつさいしょのいきものは、いったいどこでうまれたんだろう？それは海！地球のいのちのもとは、何億年もまえの、海のなかでうまれた。

ホホジロザメ、トビウオ、タツノオトシゴ、イルカなど、いろいろな水中生物のホネを見てみよう。ホネのちがいは、生きかたのちがいをおしえてくれる。もうきみは、ホネはかせ！

5・6年生

「マッチ箱日記」 ポール・フライシュマン　文　バグラム・イバトゥーリン　絵　島式子　訳　島玲子　訳／BL出版

ひいじいちゃんが持つたくさんのマッチ箱には、それぞれいろんなものが入っている。生まれ故郷のイタリアのオリーブの種、ほとんど会えなかった父さんの写真、船旅で日にちを数えるのに使ったひまわりの種。読み書きができなかったひいじいちゃんは、そうやって忘れたくないことをマッチ箱に残しておいたんだって。マッチ箱に大事にしまわれた思い出を、ひいじいちゃんはわたしにひとつひとつ話してくれた。

「転校生は忍びのつかい」　加部鈴子　作　平澤朋子　絵／岩崎書店

一学期終了間際に浩太のクラスに転校してきた筧宗助。季節はずれの転校生は浩太の近所に住んでいるらしい。宗助は言葉すくなで、特にだれとも友だちにならないまま終業式を迎えた。でも、夏休みのある日、浩太は忍者ゴッコで修行をしている宗助を見つけ、いっしょに修行をするようになる。しだいに宗助と親しくなっていく浩太は、ある日、彼の秘密を知ってしまう。宗助は本物の忍者だった。

「かさねちゃんにきいてみな」　有沢佳映　著／講談社

オレは間宮小学校登校班・南雲町二班の副班長ユッキー。個性派ぞろいの二班の登校はいつも大騒ぎだ。行動が予測できないリュウセイ、いつもうるさい兄弟の太郎と次郎、一年生にして「狂犬」のミツ…。この班が毎日登校できているのは、班長であるかさねちゃんのおかげだ。かさねちゃんは頭が良くてやさしくて、オレたちのことをちゃんとわかっている。でも、かさねちゃんがすごいのはそれだけじゃないんだ。

「おいでフレック、ぼくのところに」 エヴァ・イボットソン　著　三辺律子　訳／偕成社

ずっと犬がほしくてほしくてたまらなかったハルのところへ、まちにまった犬がやってきました。名前はフレック。フレックとの生活は、ハルにとって想像以上にすてきなものでした。ところが、実はフレックは週末だけレンタルする犬で、両親はこのことをハルにかくしていたのです。月曜日の朝、両親がフレックをペット社へ返してしまったことを知ったハルは、フレックをとりかえすために大きな決心をします。

「だれにも言えない約束」　ジーン・ブッカー　作　岡本さゆり　訳　中山成子　絵／文研出版

第二次世界大戦中のイギリス。十二歳のエレンは爆撃におびえながらも、成績や人間関係になやむふつうの日常を送っていた。ところが、お父さんが空襲でけがをして入院し、お母さんは付きそいで、離れた町に行ってしまう。そんなある日、たまたま入った小屋でエレンが出会ったのは、敵であるはずのドイツ兵！そのとき、ドイツ軍の爆撃を受け、二人はがれきの中に閉じこめられてしまった。

「サースキの笛がきこえる」　エロイーズ・マッグロウ　作　斎藤倫子　訳　丹地陽子　絵／偕成社

「この子（サースキ）は、とりかえ子じゃないだろうか。」最初にそう思ったのは、サースキのおばあさんベスだった。言い伝えによると、妖精が人間の子どもをゆりかごからさらい、かわりに妖精の子どもを残していくことがあるという。ベスはしばらくのあいだ、その思いを心のうちにしまっておいたが、サースキは、成長するにつれて、ますますふうがわりな子になっていった。

「図書館のトリセツ」　福本友美子　著　江口絵理　著　スギヤマカナヨ　絵／講談社

図書館とはどんなところでしょうか。みなさんの家の近くに図書館はありますか。この本は図書館を使うときの悩みや不思議を解決してくれる本です。おもしろい本をさがすにはどうするの？わからないことがあった場合は？本はどのようにならんでいるの？レファレンスってなに？さあ、この本を読んで図書館探検開始です。

「タマゾン川－多摩川でいのちを考える－」　山崎充哲　著／旬報社

アロワナ、ピラニア、グッピー、プレコ…、日本の川に捨てられる外国の魚たち。都会の真ん中を流れる多摩川に、アマゾンの肉食魚やカラフルな熱帯魚が泳いでいるという「タマゾン川」現象。多摩川がタマゾン川となることが、生き物たちにとって、どのような問題があるのかをいっしょに考えていきます。